

五三

猿著聞集

五

溯々江湖一水秋小舟回
棹向蘆洲晚烟連浦漁舫
影著里潮生玉鏡流

秋日湖中浮舟 漁村暮仙社題

舟とめて志をこめて月をこめて
月さまたるはなれし舟のうち
全

舟とめて志をこめて月をこめて
月さまたるはなれし舟のうち
全

んとてを〜ま〜り又〜ひとかくせらるうちふと心ふらう
ま〜だ

〜し〜を〜も〜し〜るもろし花のまよひのくも
ふぢりつとよ〜て〜を〜んぢ〜ふ〜て枝えだむむびく
とむかりまがてか〜る〜次の朝あさも〜死しふ〜る〜を
二〜三〜を〜てち〜二入の妹いもうとの甲かみの〜の
〜て〜も〜り〜の〜の
〜この花を〜と〜の〜合あひ苗なて〜もや
〜の〜心よ〜ひ〜ら〜び〜る〜賤しんの〜ら
〜の〜は〜も用もちひ〜る〜も〜ら〜る〜

たる昔の九五

〇六

〜ひねちの〜も〜ら〜る〜の〜の〜

〇和琴守わがみもりが雪ゆきの哥うたの末すえつ死し男おとこが怒いら〜事

〜と深川ふかがわの木下きのした和琴守わがみもりある日雪ゆきありておも〜ら死しふ
密ひそに〜ら〜る〜ら〜る〜の〜の〜
〜の甲かみ大おほの〜米こめつ〜白しろを〜ら〜る〜行いの〜
よの〜あ〜る〜白しろを〜ら〜る〜の〜や雪ゆきを〜黒くろ〜
〜と〜の〜の〜の〜何なに〜の〜
〜の〜の〜の〜今〜雪ゆきありて出
〜の〜の〜の〜

かみむつとよみてやうなる女をたぬらうちよろこぶけしむふ
くろやぶて何とうぶづ死んむひそむおぼげきさてくぬりその
のちあつふこぞとらふしぬ

○千霞吝惜の人小舟よみてやうし事

出羽の國江又の里の松家千霞冬の日窓心のゆきお書
よみて居つちち死にうりおのものをとてさる公箱のしん
とめがあらうこの日窓のゆきおきこつてお霞おのふこの
くら死世の中お炭をて死油をつひやうそてむぬむらうの
ふりよめて何むありのとくうあつるとさひるを千霞外お
ことなるふんて

はる著のし五

血お火をとめかいらお雪をつめど道あかた金ゆくる
人とよめをむむくおあつてあげていおらう

○濱風人小このおおそて哥よし事

上毛の國桐生の田中濱風本國るむをあめこの國お行をう
こゆりのとさある人るんあうまけ人やんごる死くようひとよ
おけのむいこう死そのよろこびお菊の花をさあるうさお
そむおしんごく一そふそ入くおあうせつておのひくおと哥
よむおをさうさむむ濱風がうこのああせつり濱風をて
一たすおしんごくおひつ

一夜酒いぬひーまののふらうこびおおおああせんおひつ

しつちやぶよすむたふたふして子孫ゆ人々もぞししの外お
どろどろふろつものちくしとまああふたふためこのまてこえして死

○茂登輔ゆ とまけ游女あそびお高たかよもておくる事

上野うまつけの國くに桐生きりまうの須もと茂登輔ゆとあると死みか長岑さか奇きおの死しろ

この丸山まるやま玉たまの浦うらの花月はなづき樓ろうとの入いるおのがうてひと日のこころま

るふんためへふたりのむらやあふたこそそやうなむ五日いつの游女あそび

いひつたふら茂登ゆとまけをうとむのころをえてひめめとを

ふじふたのふたふたふたふた茂登ゆとまけもかひふたふたふたふた

の日茂登ゆとまけのふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふた

山の花やまのはなのころふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

なる若者のん五

〇一七

おぢろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

游女あそびろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

おかへつものふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふた

おのめやうーむじひひろろろ茂登ゆと輔すけおのふたふたふたふたふた

ぬらせんとろやぶつらつろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

ふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふたふた

ーぶろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

るの茂登ゆと輔すけのころのこまむらむらむらむらむらむらむらむらむら

の口くちとめて游女あそびよふたふたふたふたふたふたふたふたふたふた

人ひとしてむろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

ゆひゆるるたてのちけるまけやあひよりけん又の春重が
ざんえやめでんあの日あやげむせうそじておこせう
けれど春重のまやふとくでかへくうたのせのうらうら
ねの耳みみふこそりつる梅うめいとわだのむかしのめとあぞ
おひやうりせとるまうしていかゞるらんまうせうのね

○花成家士の放蕩を哥うたゆて止やめさせ玉ひし事

西の國あへふをまう玉ふ花成君仁じんの心ふかくあましめてよく下
をまをせとるひさひさうつかうまうり人あわだ中お何なにが
とかやらひけん人つみ酒をこのこひささうおとび遊あそび女めふめでの
して上野うえのあまうの花見るとおちよせふるあそびがう行ゆ

たの春のし

〇十九

そかりそ入いる日ひは家いへお女めらぢぢがかくては家のいあひあひ
らんとおつの人ひとくサつどひてとびへくはめをたつてめが
りゆめらうのこまへあつと死し花はなまりのあんまおひでる
と死し次つぎの間まお扇あふをもちたてらんとあまを君きみうとるひて
このあひだめてこそ哥うたうたてとせんこのいぬひをたふと
ついでけりてやがてめて死しゆるう君きみあん筆ふでを取とせらるて
あんとまぢあし

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

けもんうのちやうとさかろがくそふ何とみく心ふかりら
るるこころぞたぬらんともひとつてぞろちとろく
るつるまをたやぞて袖ふいのの佛ふちうひ酒のむとそむと
ものあそびがうやもゆづるつるつこのうちもんまふの
つらまをたつぬよのちもんこをうらりくらんていせ
るやどまてこころのちあひあれよとぞちあひのつもの百
大鳥ちどりの一声ひつまふるんあつる

○百合丸中納言貞直卿小御哥を願ひし事

下総の國印西草深の香取百合丸との公翁あはぶむらとをこ
りーとちうれと一世よとのをきてひとり居の身とるの只書

一
二

よも詩つらり哥よもて老とやーるひのーまくの又華笑
と入る号ごうをやんぞたうよつてぬりしとてつひあは号を
ののちらつてふらんあつるは草深くさふかの野の鹿かのよらん
野あて下総のうちちやうらびとたつとつてまをてつて
やんぞたぬらんあつてよのちもんこをうらりくらんてい
心あひのひをうらつていづのぬつとーまをこあのがつて富小
路如泥公へかくとそこえあげるまをうらまをさうーや
がてあん哥をこそとびやる

草深野鹿

草くさふつた野のべの真菰まこの花づぬとこある雄鹿おしかのいろ出い

文政十二年戊子十一月吉日

書林

江戸 花屋久次郎

京都 楠見甚右衛門

心齋橋通安土町角

河内屋儀助

心齋橋通博勞町南江入

河内屋茂兵衛

心齋橋通備後町南江入

河内屋徳兵衛

